



# 神金公民館だより

第177号  
2024年  
12月1日



# 神金トピックス&ニュース

## 神金ふれあいまつり



10月27日、小学校校庭にて神金ふれあいまつりが開催されました。今年から、スポーツ協会神金支部だけでなく社会福祉協議会神金支部、神金健康推進会も主催に加わり、盛大に開催されました。

開会式後の朝一番はジャンケン大会から始まりました。社会福祉協議会によるグランドゴルフや健康推進会の健康相談ブースなど、世代をこえたふれあいが深められるイベントとなりました。



11月2日、「JAまつり感謝祭」が第一共選所で開催されました。

農産物の販売だけでなく、福引きや豪華賞品のくじ、餅投げなども行われ、さらにはキッチンカーも出店し、地区内外から大勢の方々が会場を訪れ、大盛況となりました。



# 神金の歴史

地元の歴史研究家でもある故飯島卓郎氏が、神金小学校PTA会報「ふもと」に執筆し寄稿した「神金の歴史」をシリーズで紹介します。

## 新青梅街道 十一

新青梅街道第一期工事は既に着工され工事は新渉していたが、第二期工事を明治八年十一月二十八日に山梨郡十七区（神金・大藤・玉宮）第十五区（七里・奥野田）丹波山村の連名にて、藤村県令（知事）に新道路開削の許可と、国・県の補助金の交付を申請する陳情書を提出した。

県はこの重望を内務卿大久保利通公に提出した。もしこの道路が竣工すれば甲州街道の笹子や小仏のような急な坂道が無くなり、東京へも近くなり、水害の心配もなく、修繕費も少なく、日本国のためになるので道路開鑿の許可と補助金の支給を受けたいとして長文の陳情書を送った。追伸として、「本道路開鑿については神奈川県下青梅町の者共、その他の便を得の趣を以て人夫二千人無賃にて助力すべき旨願ひ出候（後青梅一帯は東京市に編入）」と申請した。

十日目に、指令として返書が到着した。それには「国費多端のため補助金の儀は聞き届けがたく、民費を以て成功する可能性があるかどうか取柄の上追って通知する」とにべもない指令であった。

藤村県令は再び前回より更に長文の陳情書を提出した。その内容は切々と哀情を述べ感情を込めたものである。「二区一村の住民は神仏に祈ってこの道路の完成を願っている。此の人民達は幾千円でも幾百円でも国から補助金が来たと聞けば更に発憤して働き道路の竣功に役立つもので、工事着工の許可と補助金の交付を至急願ひ上げ奉る」と、顔い出ている。

しかし、考えてみれば、当時の国の情勢は非常事態であった。征韓論に敗れた西郷隆盛が鹿児島に帰り政府に反抗した西南の役直前であったので、青梅街道に補助金など出せないのは当然であった。

二ヶ月後の明治九年二月三日付の指令を見ると、国歩多難の折補助金の儀は多少に拘わらず聞き届けがたく、民費で施工するならば工事に着工しても宜しい。道路漬地は官地にするので一筆毎に絵図面を添えて差し出すべしと、木で鼻をくくったような指令であった。

\*次ページに続く

# 神金の歴史

県令は国からの補助金は当然あるものと思い、関係者にも話し予算にも入れていたので予定が狂い責任上窮地に追い込まれた。第一期工事で既に多額の出費をしているので、これ以上の割り当てをすることは困難だし、第二期工事は殆ど山の中で受益者は一ノ瀬高橋と丹波山村の住民であり、出労はできるが金を出す力はない人達である。

県では地租改正の直後であり、納税が滞り、怠納が多く、財政困難の折県費補助金も出せず、結局篤志家の寄付に頼る以外には道はなかった。そこで、先ず県令自ら率先寄付した。寄付の状況を見ると、県令の努力を以て県下の有力者に寄付を強要したようである。

その二・三の例を挙げると、甲府柳町丸茂平兵衛外から金百十円、山田町若尾逸平から金五百八十円、常盤町県益社から金一千五百円が寄付されている。東京の有力者と思われる人は殆ど多少に拘わらず寄附金を出している。千円以上の寄付者には銀杯三つ組。百円以上は銀杯、七十円以上は木杯三つ組、十円以上は木杯、十円以下は感状が与えられた。

因に、当時の一般労務者の賃金は午前六時から午後六時までの十二時間働いて十五銭五厘であった。

第二期工事は明治九年五月五日起工、竣切は十一年六月三十日である。工事費は六萬七千五百十七円余を費やし、難場のため多数の死傷者を出した難工事であった。特に工事費の捻出には苦心したようである。

県令は再度有力者に趣意書を送って寄付の要請をした。「起順二区一村の負担ではその能力は既に限界であり、工事中止のやむなきに至るかも知れない。将来本県の最重要路線であるので二区一村に任せ傍観せず、多少に拘わらず応分のご助力を賜りたい」と再三にわたり多方面に懇請した。甲府以外の各行政区にも助力を求めたが、もし助力できないならばその理由を申し出ると強いお達しであった。

千野村田家文書によれば、先祖村田昆棟翁は工事竣工後明治十二年十一月より近在の有力者から寄付を集めて献納した記録がある。寄付者の数は二百六名、寄附金の最高額は拾円、最低額は拾銭、寄附金合計貳百円参拾銭が記録された有志献金簿が今も残されている。